資料４

２０２７年国際園芸博覧会
政府出展基本計画
（素案）

2023 年 3 月

農林水産省・国土交通省

２０２７年国際園芸博覧会政府出展基本計画（素案）

Ⅰ　はじめに
　1　本計画の位置付け
　2　２０２７年国際園芸博覧会開催の背景、目的及び概要

Ⅱ　政府出展の意義・理念・テーマ
　1　政府出展の意義
　2　政府出展の理念
　3　政府出展のテーマ

Ⅲ　施設・空間計画
　1　政府出展区域の特性
　2　施設・空間構成の基本的方針

Ⅳ　展示計画
　1　展示フロー
　2　展示手法
　3　展示のターゲット
　4　展示の構成
　5　展示としての建築物

Ⅴ　管理運営計画
　1　展示用植物、作物の供給、育成、管理
　2　展示施設、栽培管理施設
　3　順応的な管理運営
　4　季節に応じた管理運営
　5　将来への人材育成
　6　インクルーシブ
　7　多言語対応
　8　環境配慮への対応
　9　来場者の安全の確保
　10　警備・警護

Ⅵ　行催事計画

1　メッセージ性

2　エンターテイメント性

3　参加性

4　話題性

5　季節性

Ⅶ　広報・参加計画

1　会期前からの機運醸成につながる広報

2　未来を担う子供や教育機関との共創

3　多様な主体の参加による共創

4　デジタルを活用したコミュニケーション

5　会期後のコミュニケーション

Ⅷ　今後の進め方と検討課題

1　令和５年度以降の推進スケジュール

Ⅰ　はじめに

１　本計画の位置付け

本計画は、２０２７年国際園芸博覧会（以下「本博覧会」）に開催国政府として出展するにあたり、その意義や理念、施設・空間計画や展示計画等の基本的事項についてとりまとめたものであり、今後、具体的に進められる設計等における基本的な方針となるものである。

２　２０２７年国際園芸博覧会の背景、目的及び概要

（1）背景

様々な恵みを通して「いのち」と「暮らし」を支えている生物多様性の損失、気候変動に伴う自然災害の激甚化・頻発化及び食料生産への深刻な影響等、国際社会で共通の地球環境の持続に関する課題が顕在化している。地球の環境容量は無限ではないという事実に鑑みれば、自然資本の保全と持続可能な利用が、今後の社会経済活動の鍵となる。これは、国際社会の目標である SDG s（持続可能な開発目標）においても、自然環境と密接不可分な分野（「水・衛生」、「気候変動」、「海洋資源」、「陸上資源」）に係る目標が、SDGs 全体を達成するための土台として捉えられていることにも表れている。また、我が国においても、2030 年度の温室効果ガス 46%削減、2050 年カーボンニュートラルの実現等に向け、「グリーントランスフォーメーション」（GX）の取組の鍵となるものでもある。

（2）目的

本博覧会は、植物が食料、資源、文化等の基盤であり、人間の暮らしに身近であることや、生物生息域の提供や二酸化炭素の固定等を通じ環境問題と密接に関連することに鑑み、自然資本の中でもとりわけ植物に焦点を当て、人や社会と自然との関わりを見直し、多様な最適解を構築する機会となることを目指している。

具体的には、花、緑、食、農、大地（土）、交流を博覧会における取組の主要素とし、自然と共に生きてきた我が国の歴史、知恵、文化及び技術、並びに自然環境が有する多様な機能を改めて見つめ直すとともに、世界各地の植物文化、植物資源との交流、今日得られている新たな知識や技術の活用等を通じ、持続可能な社会に向けた提案を行い、日本らしい国際社会への貢献につなげることを目的としている。

本博覧会における取組は、言わば環境共生社会への挑戦であり、経済・産業の発展に資する自然資本と技術の融合、自然観や自然環境が有する多様な機能の見つめ直し、都市の暮らしと農の関わりの見直しをはじめとした暮らしと空間のありようのリデザイン等を通して、植物に代表される自然と人・社会とのより良い関係を提案することを目指すものである。

また、国際園芸博覧会の特色でもある花や樹々に様々な要素が組み合わさることで生まれる景色（シーン）や、コンペティションなどを最大限に活かして、環境の時代を意識した市民や企業との共創と交流の舞台、心身の健康をもたらす季節感のある景観を創造し、あらゆる参加者の共感、学び、歓びを、これからの行動につなげることを目指している。

（3）概要

■ 名称

２０２７年国際園芸博覧会

International Horticultural Expo 2027, Yokohama, Japan

■ テーマ

幸せを創る明日の風景

～Scenery of the Future for Happiness～

■ サブテーマ

自然との調和　Co-adaptation

緑や農による共存　Co-existence

新産業の創出 Co-creation

連携による解決 Co-operation

■ 開催者

公益社団法人２０２７年国際園芸博覧会協会（以下「博覧会協会」）

■ 会場

旧上瀬谷通信施設（神奈川県横浜市）

■ 開催期間

2027 年 3 月 19 日（金曜日）～ 2027 年 9 月 26 日（日曜日）

■ 参加者数

1,500 万人

地域連携や ICT（情報通信技術）活用などの多様な参加形態を含む

有料来場者数：1,000 万人以上

Ⅱ　政府出展の意義・理念・テーマ

1　政府出展の意義

これまで国内で開催された国際博覧会における政府出展は、博覧会の中核を構成し、博覧会の目的やテーマを踏まえ、地球規模の課題解決への展望を提示するとともに、日本の文化や産業、技術等の表現や国の政策に対する国民の理解と協力を得るための発信をしてきた。

1990 年の大阪花の万博における政府出展は、「21 世紀における人間と花・緑とのかかわりを求めて」をテーマに、花と緑を通じた潤いのある豊かな社会の創出と文化の向上を訴えるとともに、花と緑を媒介にした新しい日本のイメージを示し、花き園芸・造園産業の発展、都市緑化の普及・啓発に向けた取組の加速化、花きの消費拡大に大きな効果を与えた。

37 年の時を経て日本で再び開催される本博覧会は、1500 万人の参加を見込む最大級のイベントであり、国内外から多くの関心が寄せられる。こうした機会を活用し政府出展を行うことは、本博覧会の目的達成に資する取組を開催国政府として先導するとともに、関連する国の政策の実現によりもたらされる社会・暮らしの将来像を具体的に提示し、政策への理解とその社会実装を促進する観点、さらにはこれらを我が国のノウハウとして発信し国際社会へ貢献する観点から、大きな意義を有するものと考えられる。

（1）政府出展により推進する政策

本博覧会が、自然資本、とりわけ植物に焦点を当て、人や社会と自然との関わりを見直し、多様な最適解を構築する機会とすることを目指していることに鑑み、「グリーンインフラ」と「みどりの食料システム」を、政府出展により国民の理解の促進と社会実装を進めるべき政策の中心に据え、生活（国土・都市・地域づくり）と生産（農）の両面から、本博覧会のテーマを先導することとする。

グリーンインフラは、持続可能で魅力ある国土・都市・地域づくりの観点から、社会資本整備や土地利用等のハード・ソフト両面において自然環境が有する多様な機能を活用する政策であり、国、地方公共団体、民間企業、学術団体等が連携して取組を推進している。

みどりの食料システムは、持続可能で魅力ある国土・都市・地域を土台として、命を支える食をもたらす「農」に係る政策である。気候変動への対応のほか、担い手の減少や新型コロナウイルスのまん延等を契機としたサプライチェーンの混乱などにより生じた食料安全保障の観点も踏まえ、また、SDGs や環境への対応を根本に据え、生産力の向上と持続性の両立を実現する食料システムの確立を目指すものである。

政府出展では、これらの政策を中心に据えつつ、自然資本の保全と持続可能な利用に係る取組を推進することで、SDGs 達成への貢献をはじめ、自然を活用した解決策（NbS：Nature based Solution)や自然・生物多様性の回復（Nature Positive）に係る取組の推進、人口減少や少子高齢化が進行する社会における暮らしのあり方や経済発展の方策の提案等にも貢献するものとする。

（2）政府出展の意義を果たすための視点

1）日本の自然観の見つめ直し

現在では、都市と農村、生活と生産が切り離され、日常生活の中で、自然環境が有する多様な機能に気づくことが困難になっており、「グリーンインフラ」や「みどりの食料システム」等の政策に対する理解の促進や社会実装を進めるためには、離れてしまった人と自然との距離を身近に感じることや、植物が

人をはじめとする生命を支えていること、人が生命の潮流と循環の中で生きていることを改めて強く認識する必要がある。

そのため政府出展では、我が国が四季のある豊かな自然に囲まれ、日本人が、植物との共生み（ともうみ）[1]による暮らし・文化を多く実践してきたことを見つめ直すという視点が重要となる。

例えば、里山にみられるように、生態系サービスを享受するための適度な人の関与と、それによってもたらされる食料や暮らしに必要な資材を得ることをはじめ、地域にとって望ましい生態系の安定や、森を守ることで水資源を確保するだけでなく海をも育むという循環型の暮らしを、地域の知恵と協働により持続してきた。

また、花きは、植物の生命力や自然への尊崇を背景に、いけばなや盆栽を始め、和歌などに取り上げられ、日本独自の文化の創造に大きく寄与してきた。特に、江戸時代には、日本人の花を愛する国民性と園芸技術により、園芸ブームが巻き起こり、様々な草花の品種改良が、庶民レベルまで浸透し海外からも高く評価されていた。

人々の命を支える農は、単なる食料生産ではなく、人々の生業を通じ、気候風土に生かされつつ、多種多様な郷土の祭事や文化を育み、地域の生活の礎となってきた。また、棚田や里山など農が創りだす景観は、自然と暮らしが融合した日本の原風景を描くとともに、災害防止や国土の保全など多様な効用をもたらしてきた。

庭園文化に目を向けると、日本最古の作庭書である「作庭記」において、作庭の基本として地形などの自然や敷地、場所の風情、大自然の風景を踏まえることが示されているように、我が国では自然本位の庭園観が古来醸成されてきた。

他方、こうした植物との関わりを通じて育まれてきた価値観、知識、技術、文化、伝統や、これらを支える人材、資源などの有形・無形の基盤が喪失しつつあること、特に、自然と共にあることで発展してきた農業では、地球温暖化などが進む中で様々な影響が生じているほか、化学肥料や化学農薬への過度な依存による環境への負荷が懸念されるようになっていることに警鐘を鳴らす視点も重要である。

2）花や緑、農、大地を礎とする日本の将来像の提示

政府出展では、日本の自然観を見つめ直し、明日の社会・暮らしにおけるヒントを得るだけでなく、Society5.0 等、新たな知識や技術がもたらす社会変革や、科学技術の発展に伴い明らかになりつつある花や緑の効用を最大限活かすことで、グリーンインフラやみどりの食料システム等に係る取組の社会実装が進んだ将来像を示す視点が重要である。具体的には、環境負荷の小さい循環型の暮らし、花や緑とともにある新たな都市像、持続可能な農の姿等、国土全体の様々な地域に目を向け、生産と生活が融合し、人と自然が共に生きる持続可能で多様性に富んだ社会の将来像を提示する視点が重要である。

すなわち、自然と共に生きることで営まれてきた日本の暮らしと、それが育んできた日本の風景（ランドスケープ）、そしてその暮らしを支えてきた農業、林業、園芸、造園などの伝統的な技術を見つめ直すとともに、今日得られている最先端の知識・技術を加えて、未来へつながる方法論へと再構築し、政府出展としてその具現化を希求する視点が重要である。

---

[1] 多様な生物や森羅万象とともに相互関係を持ちながら調和し、共に生き、共に生み出していく様。「古事記」における「共生」の読み方。

２　政府出展の理念

生物多様性の損失、気候変動に伴う自然災害の激甚化・頻発化及び食料生産への深刻な影響等、国際社会で共通の地球環境の持続に関する課題が顕在化している。こうした現実を直視し、以下を理念として政府出展を実施する。

「暮らしとともにある日本の自然観の見つめ直し」

日本の自然に係る思想、文化、美意識を振り返り、植物をはじめとする自然と共生してきた自然観を見つめ直す場とする。さらに、植物が果たす多様な機能を活用してきた日本の知恵や技術の巧みさを再認識する場とする。

「花や緑、農、大地を礎とする日本の将来像の提示」

日本に古来受け継がれてきた知恵や新たな知識・技術を結集し、花や緑、農、大地が果たす多様な機能を基盤とする持続可能で幸福感が深まる社会や暮らしを、国際的に共有可能な日本の将来像として提示する。それにより、人々が気づきを得て、その後の探求や実践を促す場とする。

３　政府出展のテーマ

本出展の意義・理念を踏まえ、『物理的・空間的機能や効果だけでなく、良好な景観や地域の歴史・風土、生活文化の形成や自然観、郷土愛の醸成等、国民の精神性や満ち足りた幸福感、心身の健康の向上など多くの価値観を包含する包括的な概念をより強く込めた言葉』[2]である「みどり」をキーワードとして使用したテーマ例や、政府出展懇談会で提案のあったキーワードを以下に示す。最終なテーマは、具体的な展示概要が定まった段階で、当該内容を端的に表現する視点も踏まえて改めて検討・決定する。

【テーマ例】

（案１）みどりがつむぐ明日の暮らし　　Weaving the Future Life from “MIDORI(Green)”

（案２）みどりがつむぐ持続可能な未来　　Weaving the ustainable Future from “MIDORI(Green)”

（案３）みどりとつくる持続可能な社会
Creating/Sketching Green Society for sustainable future and well-being

【キーワード例】

移り変わる四季や儚い自然観が伝わるもの／その時代が想像できるもの／
耕す・想像する（cultivate・creating）／成熟した豊かな暮らし／めぐる／醸す／つながり／
活力／活性化／生命力／集約　など

[2] 「新しい時代における「みどり」の整備・保全・管理のあり方と総合的な施策の展開について（国土交通省）」より

Ⅲ　施設・空間計画

1　政府出展区域の特性

（1）位置

政府出展区域（以下、「本区域」とする）は、本博覧会の会場区域（以下、「会場区域」とする）の東側を予定している（図１及び２）。

図１　会場区域[3]における本区域の位置

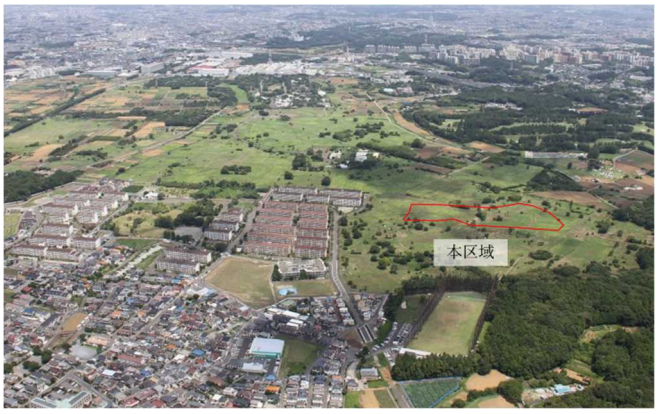


図２　本区域周辺の航空写真[4]

（2）地形・植生

会場区域が位置する横浜市は、東部を下末吉台地、中央部を多摩・三浦丘陵（形態的特徴から「イルカ丘陵」と称される）が縦断し、西部は相模原台地により形成されている。また、鶴見川、境川、柏尾川といった東京湾や相模湾に注ぐ河川があり、これらの河川に注ぐ水路が住宅域の奥深くまで入り込むことで、水路–河川–海域とつながる水の軸となっており、広域的にも連続した水・緑環境を有している。

会場区域は多摩・三浦丘陵に位置し、周辺は瀬谷市民の森、上川井市民の森、三保市民の森や横浜動物の森公園等により、自然豊かな環境が形成されている（図３及び図４）。会場区域及びその周辺は、昔ながらの谷戸の景観が広がり、コナラ・クヌギの二次林を含む良好な谷戸生態系が残されていることから、横浜市の「緑の 10 大拠点」の一つである「川井・矢指・上瀬谷地区」に位置付けられている。また、会場区域を含む多摩・三浦丘陵は、首都圏における自然環境の保全、再生、創出に向けて取り組む地域や関係主体の今後目指す一つの方向性として取りまとめられた「首都圏の都市環境インフラのグランドデザイン」[5]において、保全すべき自然環境に位置付けられるとともに、「多摩・三浦丘陵に関する緑と水景に関する広域連携会議」[6]により、緑や水景の「保全・再生・創出・利活用」に関する取組の連携や、生物多様性をふまえた緑と水景の広域的ネットワークの構築が図られる等、広域的な観点からも重要な自然環境として位置づけられている。

---

[3] ２０２７年国際園芸博覧会基本計画（２０２７年国際園芸博覧会協会）

[4] ２０２７年国際園芸博覧会基本計画（２０２７年国際園芸博覧会協会）

[5]「自然環境の総点検等に関する協議会（農林水産省、国土交通省、環境省及び関係都県市で構成）」策定（平成 16 年３月）

[6] 多摩・三浦丘陵を抱える 13 自治体が連携し、地域の重要な緑と水景を「みどりはつなぎ手」という共通認識に基づき、「市民・企業・行政の協働によって保全・再生・創出・活用していくこと（新たなるコモンズの再生）」を目的とした会議

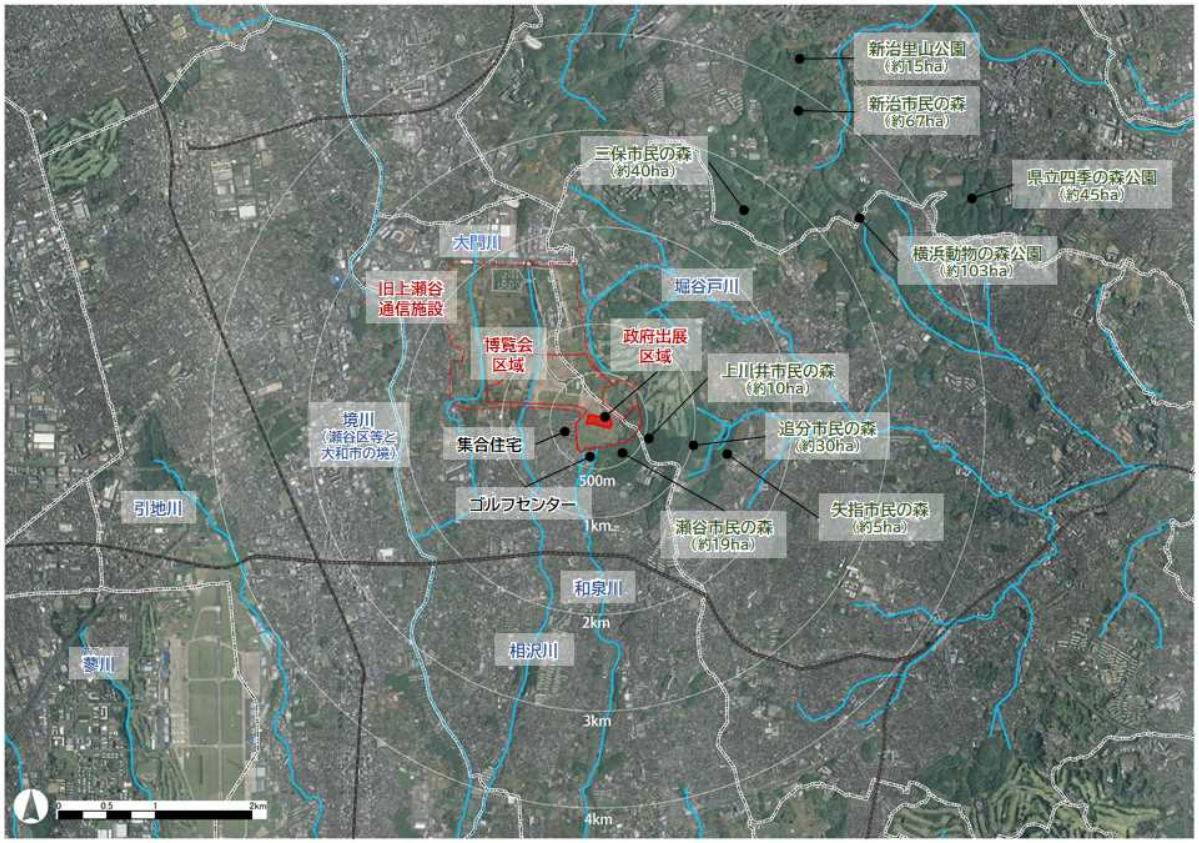


図３　会場周辺の主な緑地と河川

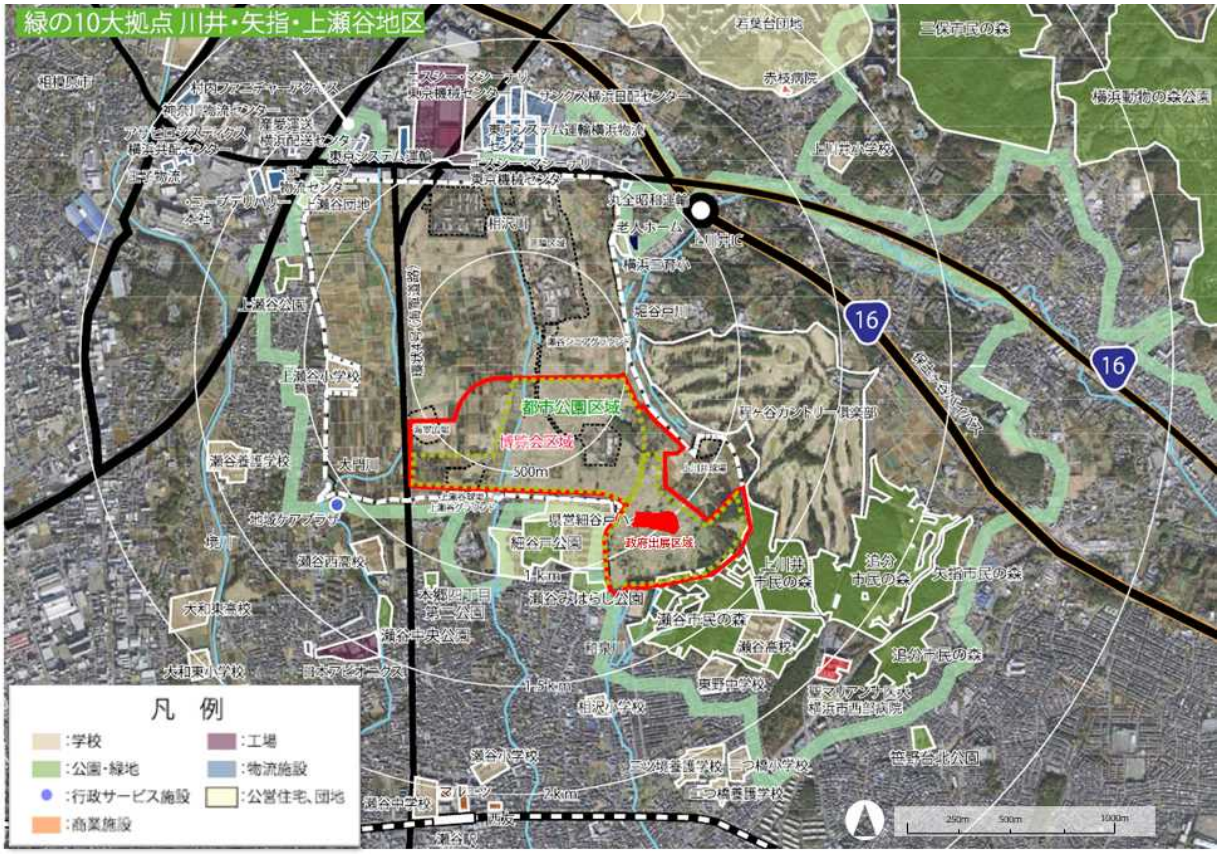


図４　本区域と周辺の緑地との位置関係

本区域は会場区域の中でも比較的起伏のある微地形（アンジュレーション）が形成され、中央部は和泉川の流頭が位置する窪地である。

和泉川は、かつて武蔵国と相模国の国境とされた境川[7]の支川であり、境川の流域全体で、約 211 ㎢、約 158 万人（平成 22 年時点）を抱えている[8]（図５）。和泉川の流頭付近では、本区域内ではほとんど水量が確認できないが、本区域の南側の下流に行くにつれ、徐々に流量が増加する。水のしみ出しや湧水箇所は複数あると考えられるが、明確な湧出口は不明である（図６）。

本区域では、和泉川以西は東方向に下り勾配、和泉川以東は本区域の境界部まで緩やかな上り勾配となっており、草地が広がる中で樹木が点在し、北側縁辺部及び和泉川流頭には竹林が見られる（図７）。

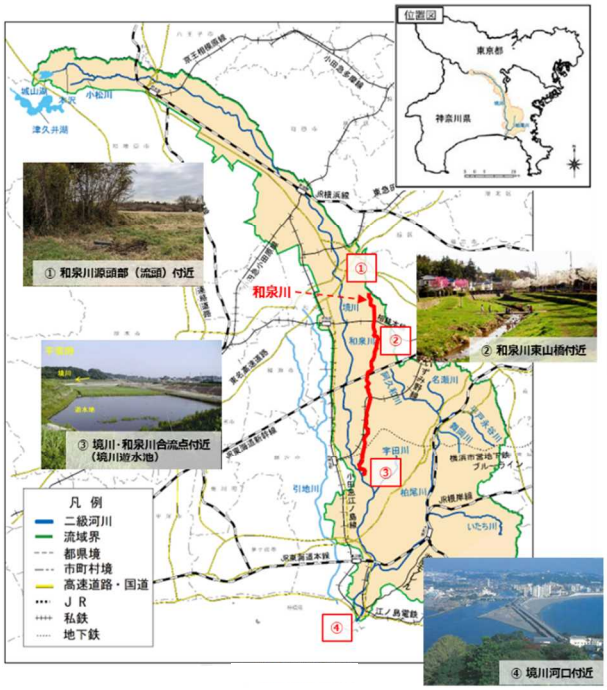


図５ 境川流域と和泉川の概要[9]

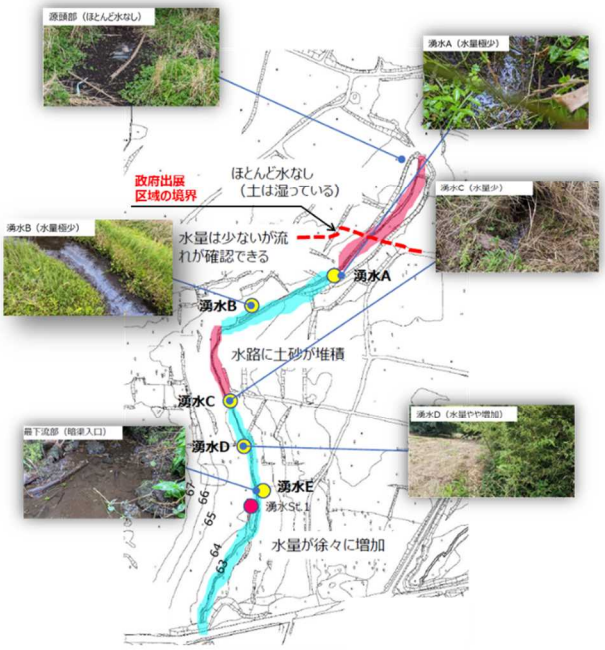


図６ 和泉川流頭付近の概要

[7] 文禄３（1594）年に行われた太閤検地の記録によれば「相武（相模と武蔵）の国界とし、境川と称す」とあり、これが境川と呼ばれるようになったゆえんといわれている（神奈川県、東京都、横浜市「境川水系河川整備計画（平成 27 年４月））

[8] 神奈川県、東京都、横浜市「境川水系河川整備計画（平成 27 年４月）

[9] 神奈川県、東京都、横浜市「境川水系河川整備計画（平成 27 年４月）」を基に作成

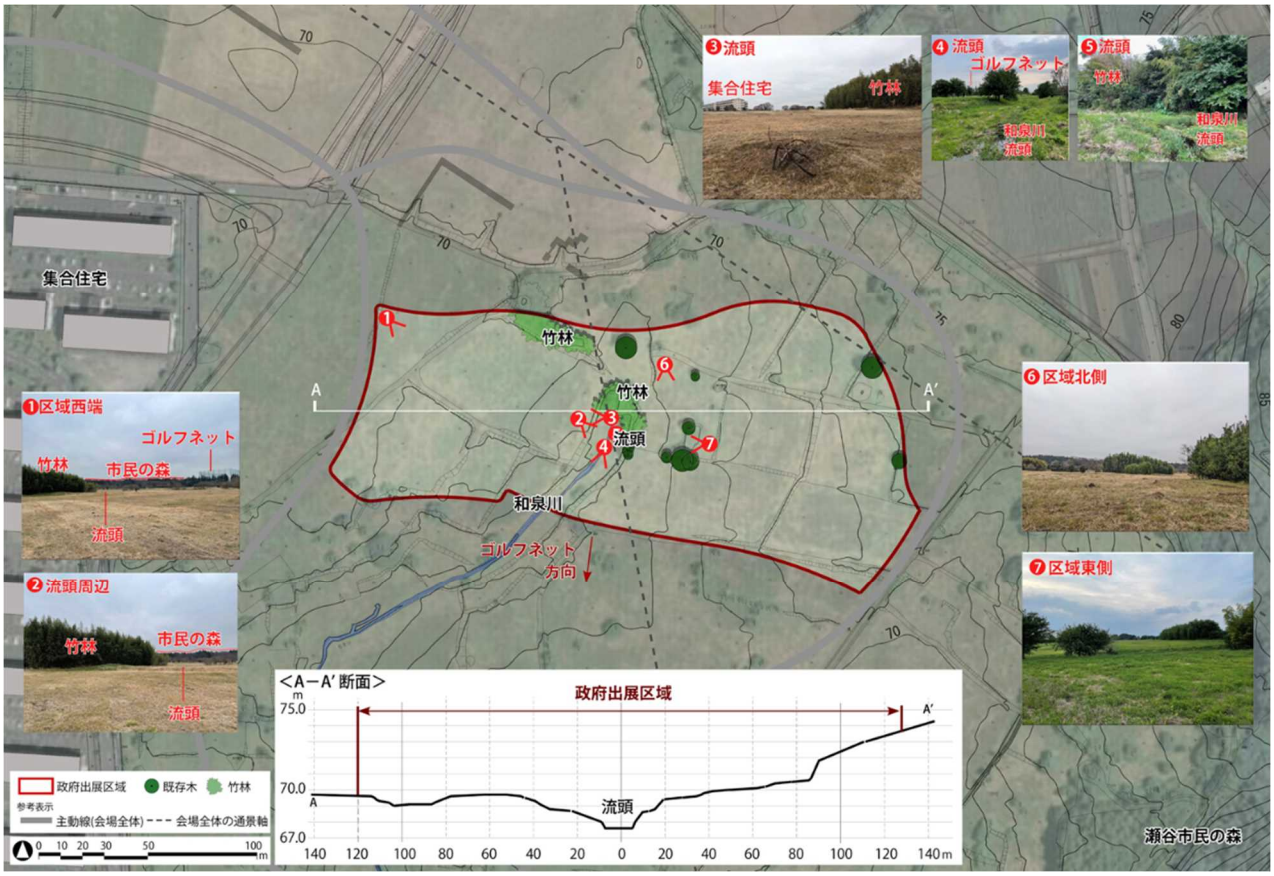


図７　本区域の特性（地形的要素）

（３）景観特性

本区域からは、視対象の多くが約 400m 以内に位置しており、東・南方向に約 200～300m 離れた距離には樹林が広がっている（図８）。この樹林は、瀬谷区と旭区の境に広がる自然豊かな「瀬谷市民の森」へと続いている。また、本区域は中央に和泉川が位置する凹型地形となっていることで、和泉川以西から東方向を望む際は、視点から一度下降し再び立ち上がって市民の森へと続く地形のダイナミズムを連続的に捉えることができる。さらには、好天時には、集合住宅及び会場内の樹木の間から丹沢山系の稜線が確認できる。東・南方向には自然的な景観が連続している一方で、本区域から西方向には集合住宅、南方向には樹林の背後にゴルフネットの一部が確認でき、人工的な景観が現れることから、本区域から一体感のある自然的な景観を創出するためには、これらの人工的な景観に配慮する必要がある。

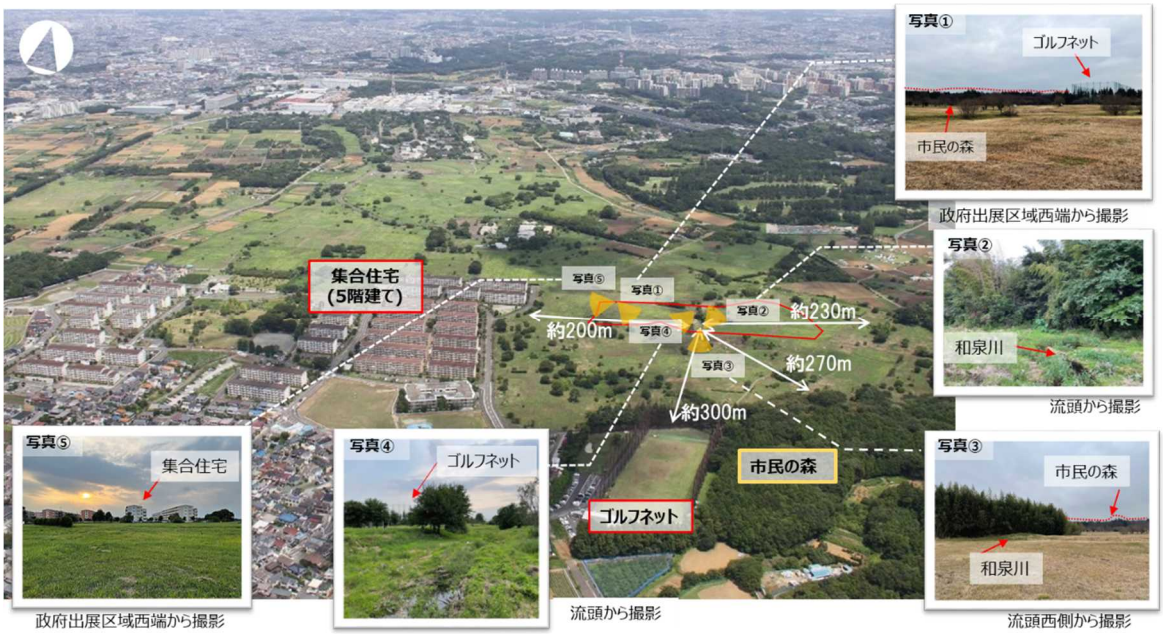


図８　本区域の景観特性

（４）博覧会会場計画との関係

会場計画では、来場者の主動線が会場全体を回遊する形状に配置されており、本区域は西側と東側の敷地境界で主動線と隣接する（図９）。

また、本区域の北側では、博覧会協会による展示施設等が計画されており、高い集客力を持つ空間となることが想定されるため、本博覧会への来場者は北西側の会場区域から、当該空間を経由して本区域に至ることが考えられる。

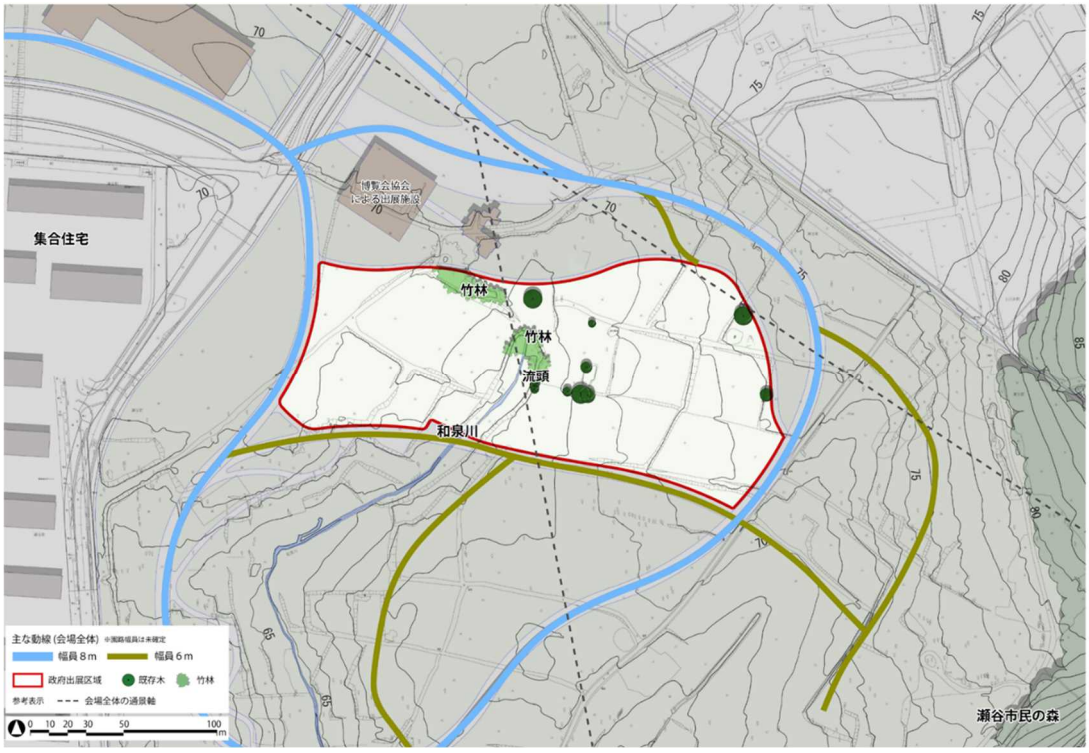
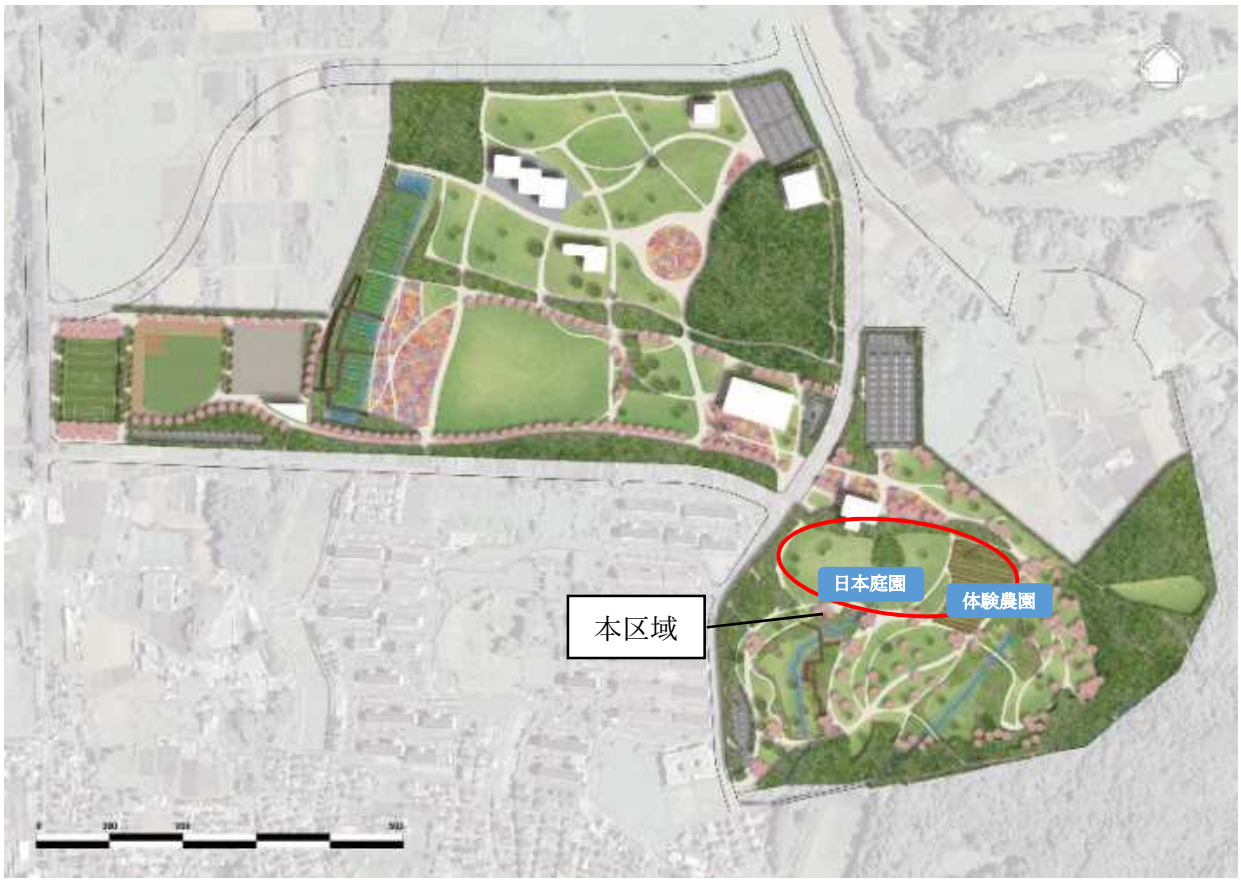


図９　本区域周辺の動線計画

（5）博覧会後の都市公園計画における本区域

本博覧会後は、会場の一部が横浜市の都市公園として引き継がれる計画となっており、当該公園の基本計画（案）では、本区域は日本庭園と体験農園として利用される想定である（図 10）。そのため、本出展の検討に当たっては、将来計画されている公園での活用を見据えつつ検討を進める視点が必要となる。

図 10　（仮称）旧上瀬谷通信施設公園基本計画(案)基本計画図[10]と本区域



[10] 横浜市「(仮称）旧上瀬谷通信施設公園基本計画（案)」

2　施設・空間構成の基本的方針

政府出展の意義、理念及び本区域の特性を踏まえ、以下を施設・空間構成の基本的方針とする。

（1）建築物の規模・機能

出展に係る建築物は、過去の博覧会の実績等も踏まえ、建築面積の上限を 5,000 ㎡程度とし、来場者が出入りする展示部門と、管理運営に必要な機能を持つ管理部門に大別する。展示部門は、最大で 3,000 ㎡程度とし、今後の展示手法の具体化と並行して、必要規模・機能を決定する。また、管理部門は、最大で 2,000 ㎡程度とし、博覧会会場全体の計画等を踏まえ、本区域内に整備すべき機能を決定する。

（2）施設・空間の設定

1)施設・空間構成

比較的起伏のある微地形（アンジュレーション）や和泉川の流頭など、現状の特性をいかした空間とする。

出展に係る建築物は、地形の改変を可能な限り避け、微地形との調和を図る観点、東方向の市民の森への眺望や屋外展示空間への多様な眺望を創出する観点から、本区域内の南側に配置し、和泉川を挟んで東西に分棟とする。

東西の建築物、和泉川の流頭や、既存木及び竹林等の位置関係を踏まえると、本区域は大きく西側空間と東側空間、両者の間に位置する和泉川の流頭周辺の空間により構成されることとなる。東西の空間を渡りによって接続することで、和泉川の流頭を保全し、かつ象徴的な展示要素として活用するとともに、単に東西の空間を物理的につなぐだけでなく、鳥居の様に場面を転換させる結界の役割を果たすものとして検討する。

さらに、庭屋一如[11]の考えのもと、軒、庇、縁側や坪庭等の半屋外・半屋内の空間を創出し、建築物と屋外空間を連続的（シームレス）に接続し、相互に融合した空間とすることを目指すとともに、本区域の北側では博覧会協会による展示施設等が計画され、南側の敷地は和泉川の沿川として連続していることから、これら敷地との一体的な景観形成にも留意する。

また、植物一つ一つを主役と捉えることを前提としつつ、リアルとデジタルが融合した空間構成を検討する。その際、デジタル技術が、本区域内の自然環境や景観の保全を図る手法となり得る観点にも留意する。

2)本区域内の動線

繁忙期における来場者の安全確保の観点や、ストーリー性や全体としてのまとまりを持った展示とする観点から、本区域内の基本となる動線を設定する。基本となる動線は、本区域の西側と東側の敷地境界が会場全体の主動線と接する観点や、市民の森への眺望をいかす観点から、西から東に向けて設定する。また、屋外の各展示空間を回遊できる副動線を設定するとともに、必要に応じ、副動線から伸びる細園路の設定も検討する。動線を三段階に設定することで、繁忙期の対応に加え、繁忙期以外においては、来場者が自身の関心に応じ自由に本区域を散策し、学びを深めることができる。

---

[11] 庭園と建築物は一体のもので、相互に調和した空間が日本の伝統美であるとする考え方

また、本区域の入口は、本区域北側の博覧会協会による出展施設が高い集客力を持つと想定されることを踏まえ、当該施設の方向から入場することを前提に本区域の北西に設定する。出口は、繁忙期においても、主動線から屋外展示も含めた多くの展示体験を見込めるよう、本区域の北東に設定する。

（3）全般的な配慮事項

1）自然環境や生物多様性の保全

本区域の既存の樹木や竹林は保全活用し、和泉川の流頭や比較的起伏のある微地形（アンジュレーション）をいかした空間とする。また、本区域を含む会場区域及び周辺には、良好な谷戸生態系が残されていること等から、生物多様性の保全に配慮した施設・空間構成とする。

2）ユニバーサルデザイン

来場者、スタッフ、関係者、全ての方が安全・快適に過ごせるよう、ユニバーサルデザインの観点から、障がいの有無、年齢、性別、人種等にかかわらず多様な人々が利用しやすい空間とする。

3）サステイナブルな設計・整備

設計や整備にあたっては、環境負荷の低減に配慮し、サステイナブルな資源利用を積極的に選択することを目指し、関係機関とも連携し、本博覧会終了後の材料の再利用など、資源循環型の建築や庭園とするための検討を行う。

4）視線誘導の工夫

集合住宅やゴルフネットによる人工的な景観への眺望については、来場者の視線を誘導する工夫を取り入れることを大前提とし、これを補完するものとして、施設や植栽による遮蔽等で対応する。

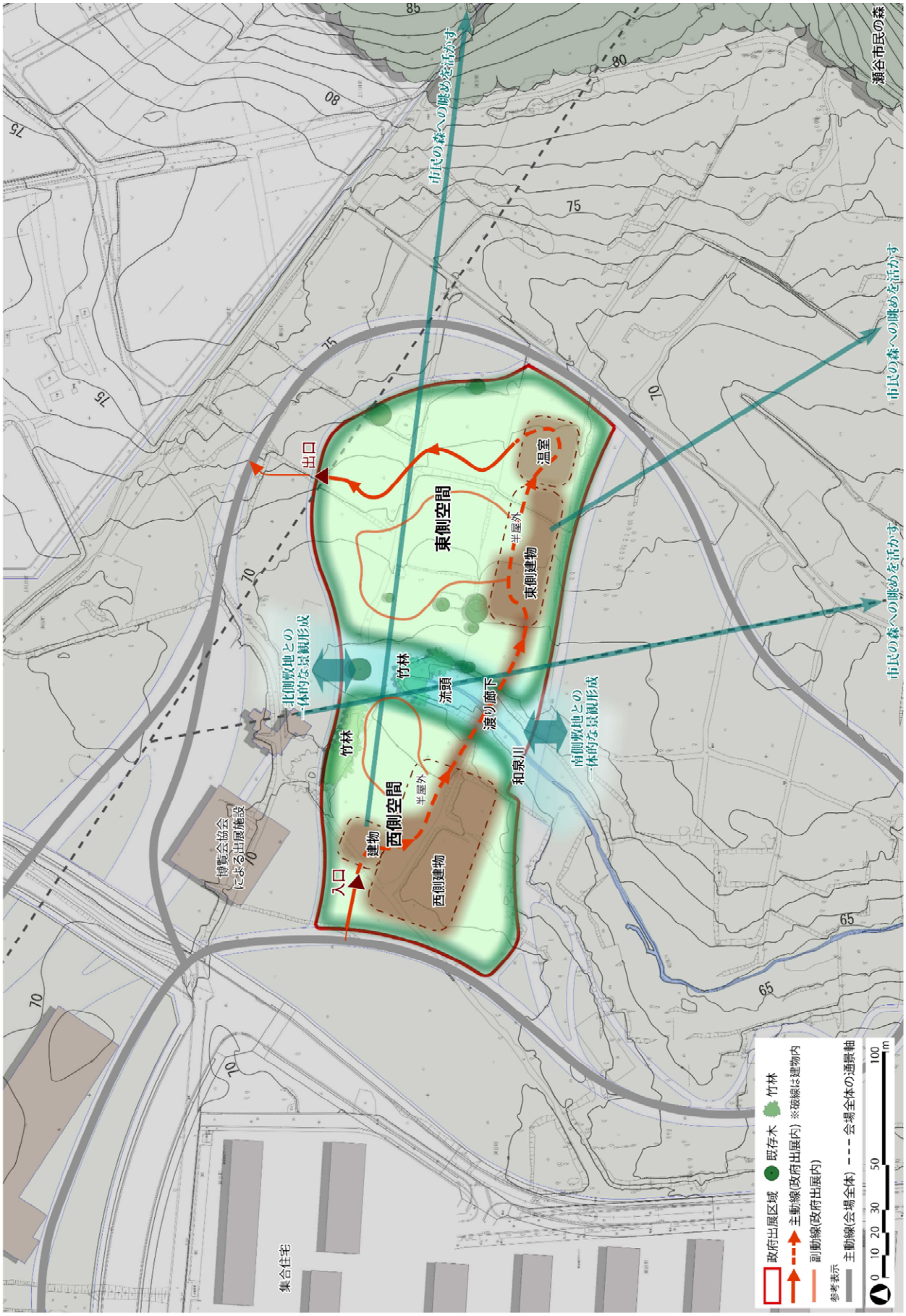


図 11　施設・空間構成の基本的方針

Ⅳ　展示計画

政府出展の理念を踏まえ、政府出展を通じて推進する政策の実現によりもたらされる、社会と暮らしの将来像を提案する展示を展開する。そのため、暮らしや文化などの視点から、自然と共生してきた日本の知恵や技術を知ることで、日本の自然観を体感するとともに、現代における諸課題を認識し、持続性の観点から現代の暮らしを捉え直す展示とする。その上で、生活における空間、社会（都市）における空間、さらには、身近な空間から離れた自然環境における空間のそれぞれについて、どのような社会と暮らしを目指すことができるか、その将来像の提案を通じ、来場者自らがなすべきことを探求し、実践することを促す展示とする（図 12）。

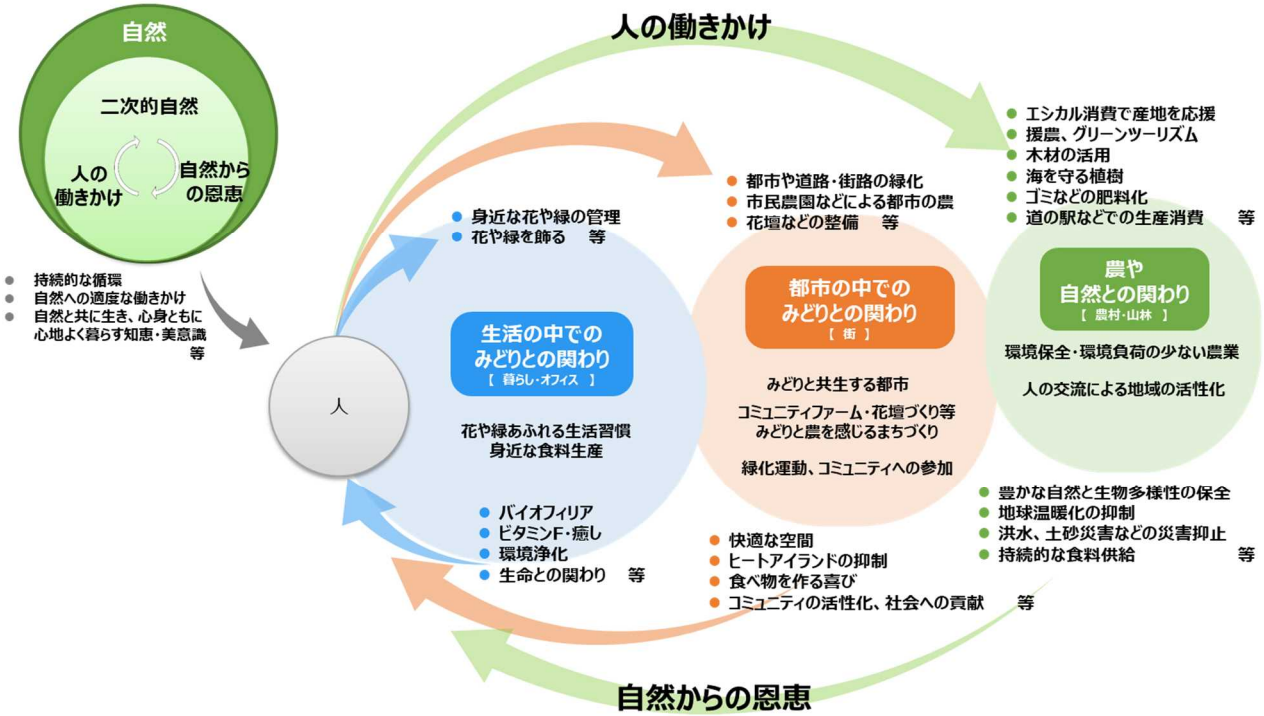


図 12 政府出展で示す明日の社会と暮らし(みどりと関わる 3 つの環)
～みどりとの共生を新たな形で構築する～

1　展示フロー

政府出展の理念及び施設・空間計画を踏まえ、和泉川の流頭を境として、大きく西側空間と東側空間で展示を構成する（表１）。

①西側空間では、植物が果たす多様な機能や植物との共生で培われた知恵・技術に触れ、日本の自然観を見つめ直すことで、明日の社会と暮らしに向けたヒントを得る展示を検討する。また、明日の社会と暮らしを考える上での、現代の諸課題を自身の生活に重ねるような展示とする。

②東側空間では、古来受け継がれてきた知恵や、新たな知識、技術を踏まえ、明日の社会と暮らしを提案する展示とする。

以上により、現代における新たなみどりとの共生の実現に向け、暮らしの中のみどりの重要性に気付き、日本の将来像の理解と、個々の身近な暮らしにおける行動変容を促す。

表１　出展全体の展示フロー

空間構成	展示フロー	目的
西側空間	入口	・生花を活用した展示で来場者を歓迎する。 ・市民の森への眺めをいかした庭園を一望し、屋外展示への期待、みどりの美しさ・雄大さを体感する。
	日本の自然観	・植物の仕組みや力、バイオフィリアを感じつつ、日本の伝統文化・技術や、自然と共にある暮らし・文化などから植物と共生する知恵への気づきを得る。
	日本と世界を取り巻く課題	・気候変動や生物多様性の損失、食料供給の持続性などの現在直面する課題を自身の暮らしに重ねる。
東側空間	明日の社会と暮らし	・生物多様性の保全・持続的な利用、防災など、持続性の確保のために自然環境が有する多様な機能を活用したグリーンインフラが重要であることを体感する。 ・ウェルビーイングに向け、社会や暮らしにみどりを取り入れる重要性を、花・緑を取り入れた室内空間（バイオフィリックデザイン）や特殊緑化空間で体感する。 ・自然の力の活用と、スマート農業が融合した未来の農の可能性を知る。 ・庭園内に菜園を設置し、農と触れ合うとともに、生産から生活、そして生存を問う場とする。
	出口	・各地の花でお見送りする。

２　展示手法

屋内外の展示全体として、ストーリー性や展示のまとまりに留意しつつも、来場者がそれぞれの意思で自由に回遊することを通じ、来場者に展示の意図を身近に感じてもらえるような展示を目指す。その際、体験型の展示も含め五感を刺激する展示を行い、展示の背景にあるものも伝え、多様な気づきや探求のきっかけを得られる展示を目指す。

デジタル技術については、現実では体感できないスケール感等を表現する上で効果的な手法であることから、積極的な活用を検討する。その際、デジタル技術を単なる演出手法に留めることなく、植物を主役としながらも、展示を補完し、より魅力的に伝えられるような手法を検討する。また、暮らしの中で自然とデジタルが共存できるような効果的な活用も検討する。

３　展示のターゲット

これからの社会と暮らしを担う、子供から 20 代の若年層を重要なターゲットとして捉え、これらの世代に訴求する展示を検討する。

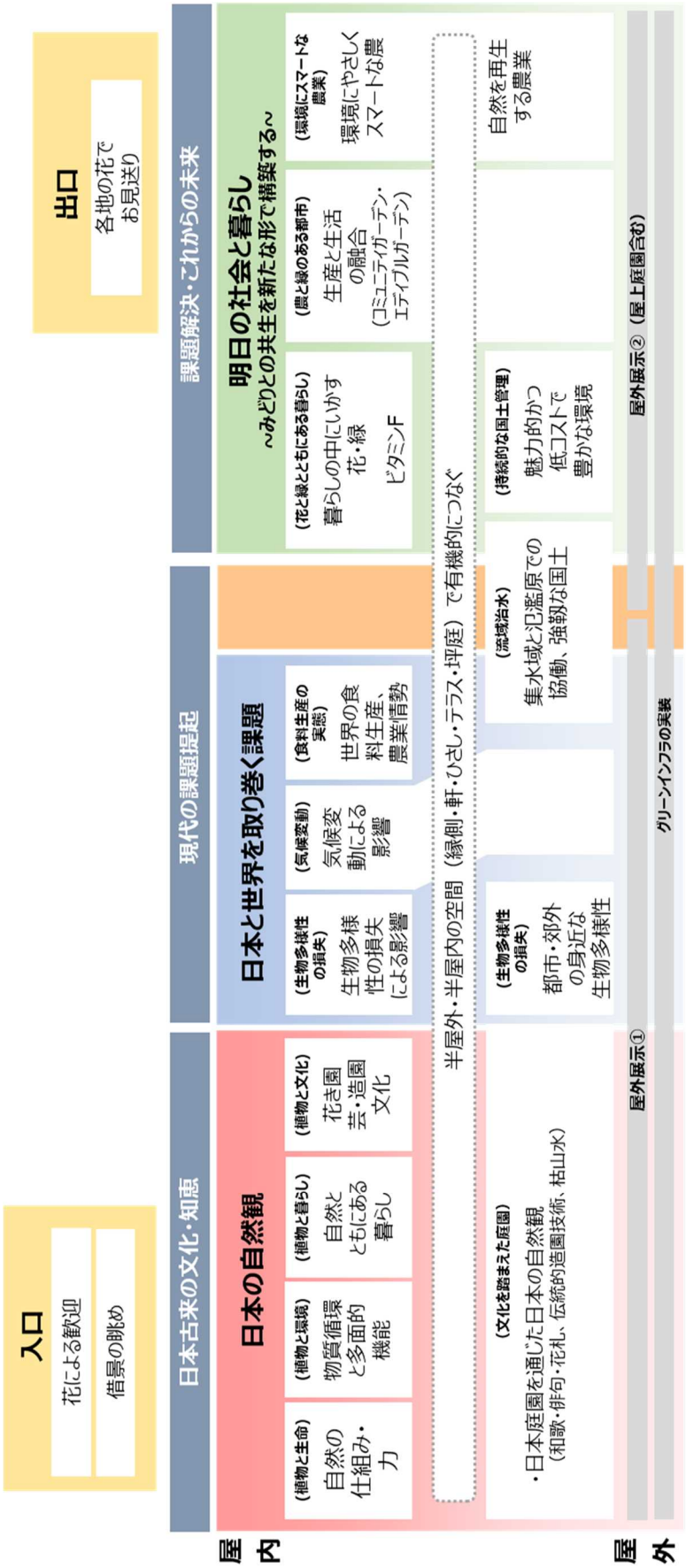


図 13 出展全体の展示フロー

4　展示の構成

（1）屋内の展示構成等

区　分		目　的	展 示 例
入口	花による歓迎	・花本来の魅力で来場者を歓迎する。	大型のフラワーアレンジメント、いけばな等
1.日本の自然観	植物と生命	【自然の仕組み・力】 ・植物の生態や繁殖の仕組み等の自然科学の基礎知識を理解し、植物の利用方法を学ぶ。	【植物の巨大模型】 ・植物の内部構造や受粉の仕組みを探求できる展示
			【植物知識】 ・多様な植物の生態や花の形状、色、香りなどの遺伝の仕組みを学べる展示
	植物と環境	【物質循環と多面的機能】 ・自然と共生した農林業は、地域の環境保全、災害防止、生物多様性の増進など、単に食料生産にとどまらない様々な効用があることに理解を深める。	【二次的自然の機能】 ・水田の洪水防止、防風林など農業の多面的機能に関する展示
	植物と暮らし	【自然とともにある暮らし】 ・自然に人が適切に関与（知恵・技術）することで、持続可能な自然の恩恵が得られることに理解を深める。 ・自然の恩恵が、様々な地域の文化・伝統を育んできたことに理解を深める。	【里山における循環機能】 ・人が関与して形成された二次的自然、自然・生物の力を活かす知恵、食料・資源循環モデルの展示 ・茅場や薪炭など入会地と里の暮らしの関係を説明する展示
			【地域文化と植物の関係】 ・植物や食等を核に、日本各地の様々な伝統文化の成立と自然との関係を説明する展示
	植物と文化	【花き園芸・造園文化】 ・いけばなや盆栽などの花き文化や詩などを通じ、日本人が示そうとした生命、自然観、美意識など日本人の感性を体感する。	【いけばなの世界】 ・いけばなの成立過程を追いながら、表現しようとした世界観や審美を説明する展示 ・いけばなの基本や様式、型などを通じ、いけばなの世界観への理解を深めるための展示
			【盆栽の世界】 ・盆栽の育成過程と、盆栽が現そうとした世界観や審美を理解する展示

			【日本文化における花】 ・花きに託した日本人の想いを理解するための万葉歌など古今の詩・文の展示
2.現代の諸課題	生物多様性の損失	【生物多様性の損失による影響】 ・農業や人々の生活が環境に与えている負荷を知り、食料生産と環境の関係を探求する契機とする。	【水田の役割】 ・水田における物質循環、土壌や微生物の役割を理解するための展示
			【農業と環境】 ・農業や人々の生活から生じる環境負荷の種類や影響度合いやみどりの食料システムを理解するための展示 ・手入れの行き届かない耕作放棄地や森林が、暮らしに与える負の影響を理解する展示
	気候変動	【気候変動による影響】 ・人々の活動が環境にどのような負荷を与えているかを理解する。	
			【気候変動の仕組みと現状】 ・温室効果ガスの発生源と気候変動の仕組みや被害を理解する展示
	食料生産の実態	【世界の食料生産、農業情勢】 ・我が国の脆弱な食料・農業事情を正確に把握し、食・農への関心を高める。	【日本の食料事情】 ・食料自給率や農業資材など食料安全保障の脆弱性を理解するための展示 ・フードロスなど、都市生活者と食料の関係への理解を深めるための展示や世界の取組事例の紹介
3,明日の社会と暮らし	花と緑とともにある暮らし	【暮らしの中にいかす花・緑】 ・先端の屋内緑化技術や補光技術等を利用しつつ、持続性にも配慮した、生活空間における装花、緑化の提案を通じ、日常利用する契機とする。	【花や緑を取り入れた明日の暮らし】 ・様々なシーンごとに、先端技術とデザインを盛り込んだ装花・緑化のモデルルーム、モデルオフィス
		【ビタミンF】 ・花や緑が、美しさ以外にも価値のあるものであることを理解し、積極的に植物を日常に取り入れるような行動を実践する契機とする。	【花・緑の効用の見える化】 ・花や緑の効用に関する学術的な展示 ・花の色や香り、触感などが心身に及ぼす影響を見える化・体験する設備 ・緑の環境浄化機能を見える化・体験する設備
	農と緑のある都市	【生産と生活の融合】 ・都市と農、緑との関わりを体感する	【身近な緑化運動やコミュニティガーデン】 ・運動体の育成に向け、市民や農業高校、産地などと共創した花壇（屋外）

			・土や生物とのふれあいやエディブルをテーマとした農的空間。
3.明日の社会と暮らし	環境にスマートな農業	【環境にやさしくスマートな農業】 ・人口減少、環境保全など農業の諸課題を解決するスマート農業への理解を通じ、農業への関心を高める。	【スマート農業】 ・スマート農業による未来の農業の姿やデータ活用し環境負荷を減らしつつ、生産性を上げる次世代農業に関する展示
			【近未来の施設園芸】 ・2050 年施設園芸のゼロエミッション化に向けた最先端の環境制御、熱供給システムを備えた温室、植物の能力を最大限生かす環境管理技術に関する展示 ・植物の能力を最大限いかす環境管理技術に関する展示
		【自然を再生する農業】 ・化石資源に頼らない持続性の高い農業について、その取組実態や環境保全効果などに理解を深め、消費行動を転換する契機とする。	【環境保全型農業の提案・自然再生を目指す農業】 ・自然をいかした有機農業の仕組みや、環境保全効果を理解するため、農地（土）の比較、学校給食など消費者への広がりの事例 ・トキやコウノトリなどの生物の再生に向けた地域農業の取組事例 ・食品残渣や下水汚泥など有機資源を地域で循環利用する循環システムの展示
出口	花による歓送	・各産地との共創による花壇や、珍しい花、歴史的価値のある花で来場者を歓送する。	・各地の花産地やフラワーパークと連携した展示 ・過去の各種コンテスト、歴史に名を残した花、ゲノム編集の花など歴史的価値のある花の展示

（2）屋外の展示構成等

入口「市民の森への眺め」、屋外展示①「文化を踏まえた日本庭園」、屋外展示②「生産・生活から生存を問う」の展示フローを構成するとともに、屋外全体でグリーンインフラを実装し、五感を刺激する体験を提供する。

区　分		目　的・展 示 例
入口	市民の森への眺め	・凹状地形上に広がる屋外展示と市民の森を一望する。 ・自然と自己とのつながりを意識するきっかけを組み込む。 ・遠くに見える空間への期待感を醸成する。
屋外展示①	文化を踏まえた日本庭園	・日本の造園技術を活用した修景・維持管理自体を展示の一つとし、自然共生する日本の自然観を表現する。 ・外国人来場者の関心も高い庭園様式を駆使し、我が国が誇る魅力として発信する。 ・都市や郊外における身近な生物多様性を可視化した展示を行う。
屋外展示②	生産・生活から生存を問う	・建築物と一体的に生産の場である圃場等を展示し、農（生産）と住まい（生活）が融合した空間を構成し、両者から生存について考える。 ・在来植物を活用するなど、地域の環境に適した魅力的かつ低コストで豊かな空間の創造（縮減社会における緑地（国土）の管理方策の提案）に挑戦する。
屋外全体	グリーンインフラの実装	・和泉川の流頭、谷地形をいかした、水を中心とし、雨水が庭園に貯留する様子を展示の一つとする。 ・集水域と氾濫原として捉え、気候変動等に対する協働のあり方を考える。 ・自然環境が有する多様な機能を活用してきた知恵・技術と、最新の技術を組み合わせた空間とし、「日本の自然観」と「明日の社会・暮らし」の架け橋とする。

5　展示としての建築物

建築物については、木造を基本に施設自体が展示となるような性質を持つものとする。西側の建築物については、日本の自然観を見つめ直す空間とするため、屋敷林や縁側、坪庭など自然を屋内にも取り入れてきた日本家屋の伝統を体感できるものとする。東側の建築物については、明日の社会と暮らしを提示する空間とするため、特殊緑化等で自然との一体性を示すとともに、省エネ基準を満たす建築を目指す。なお、屋根の雨水利用など水の循環を意識した建築とし、太陽光発電等による自然再生エネルギーの活用を行う。

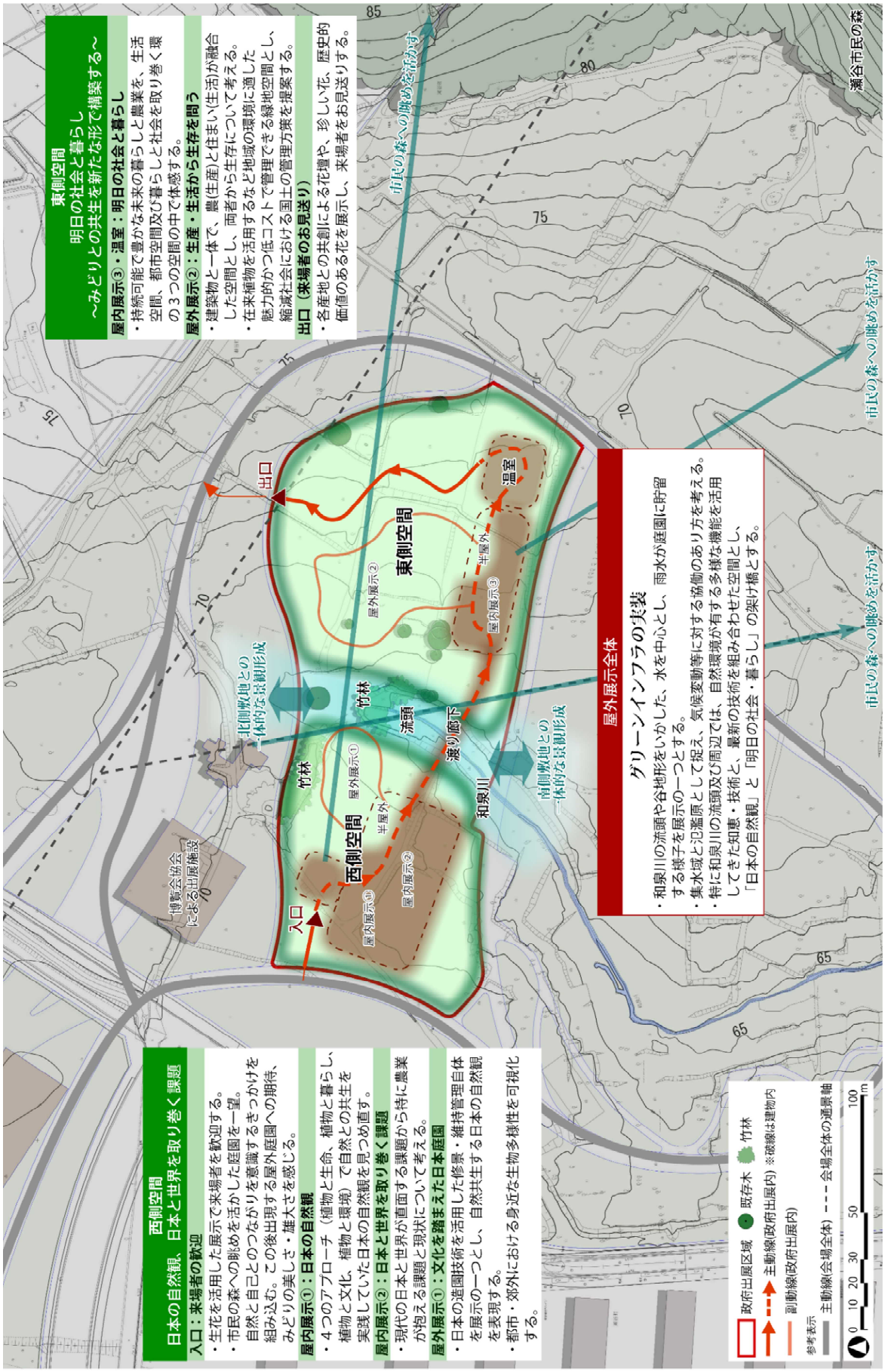

東側空間
明日の社会と暮らし
～みどりとの共生を新たな形で構築する～
屋内展示③・温室：明日の社会と暮らし
・持続可能で豊かな未来の暮らしと農業を、生活空間、都市空間及び暮らしと社会を取り巻く環の３つの空間の中で体感する。
屋外展示②：生産・生活から生存を問う
・建築物と一体で、農（生産）と住まい（生活）が融合した空間とし、両者から生存について考える。
・在来植物を活用するなど地域の環境に適した魅力的かつ低コストで管理できる緑地空間とし、縮減社会における国土の管理方策を提案する。
出口（来場者のお見送り）
・各産地との共創による花壇や、珍しい花、歴史的価値のある花を展示し、来場者をお見送りする。
西側空間
日本の自然観、日本と世界を取り巻く課題
入口：来場者の歓迎
・生花を活用した展示で来場者を歓迎する。
・市民の森への眺めを活かした庭園を一望。自然と自己とのつながりを意識するきっかけを組み込む。この後出現する屋外庭園への期待、みどりの美しさ・雄大さを感じる。
屋内展示①：日本の自然観
・４つのアプローチ（植物と生命、植物と暮らし、植物と文化、植物と環境）で自然との共生を実践していた日本の自然観を見つめ直す。
屋内展示②：日本と世界を取り巻く課題
・現代の日本と世界が直面する課題から特に農業が抱える課題と現状について考える。
屋外展示①：文化を踏まえた日本庭園
・日本の造園技術を活用した修景・維持管理自体を展示の一つとし、自然共生する日本の自然観を表現する。
・都市・郊外における身近な生物多様性を可視化する。
屋外展示全体
グリーンインフラの実装
・和泉川の流頭や谷地形をいかした、水を中心とし、雨水が庭園に貯留する様子を展示の一つとする。
・集水域と氾濫原として捉え、気候変動等に対する協働のあり方を考える。
・特に和泉川の流頭及び周辺では、自然環境が有する多様な機能を活用してきた知恵・技術と、最新の技術を組み合わせた空間とし、「日本の自然観」と「明日の社会・暮らし」の架け橋とする。
入口
出口
西側空間
東側空間
竹林
流頭
渡り廊下
和泉川
屋内展示①
屋内展示②
屋外展示①
屋外展示②
屋内展示③
半屋外
温室
博覧会協会による出展施設
北側敷地との一体的な景観形成
南側敷地との一体的な景観形成
市民の森への眺めを活かす
瀬谷市民の森
政府出展区域
既存木
竹林
主動線(政府出展内) ※破線は建物内
副動線(政府出展内)
参考表示
主動線(会場全体)
会場全体の通景軸
0 10 20 30 50 100 m

図 14 基本計画図

Ⅴ　管理運営計画

政府出展は本博覧会の中核を担う出展のひとつとして、その役割や出展のねらいにふさわしい水準を保持し、来場者が安全かつ快適な環境の中で展示を体験できる円滑かつ効率的な管理運営計画を検討する。

１　展示用植物、作物の供給、育成、管理

本博覧会の開催国政府の出展として、全期間を通じ常に花と緑を高い水準で良好な状態に維持するため、展示する植物や農作物等に関し、安定かつ効率的な供給・育成・管理ができる体制と計画を検討する。

２　展示施設、栽培管理施設

会期前から会期中に渡り緻密に育成・管理ができるよう、植栽環境を的確に維持管理できる屋内外の施設を計画する。また、大量多品目の植物を滞留することなく、円滑に搬入出・仕分け、ストック、育成管理ができる、十分なスペースと適切な設備のある栽培管理施設とストックヤードを検討する。

３　順応的な管理運営

不確実性の高い自然や生態系を対象とする事業であるため、当初の計画では想定し得ない事態にも対応できるよう、モニタリングとフィードバックを行い、継続的な管理運営を検討する。

４　季節に応じた管理運営

半年の会期の間、それぞれの季節に応じた管理運営の計画を検討する。

５　将来への人材育成

社会課題をみどりで解決するという視点のもと、ボランティア活動等を通じ、本出展に携わった方が、気づきを得て、その後の探求や実践につなげることができるような計画を検討する。

６　インクルーシブ

来場者やスタッフ、すべてのステークホルダーにおいて、多種多様な人々が積極的かつ安心して参加できるよう、インクルーシブを考慮した管理運営を検討する。

７　多言語対応

世界各国からの来場者に対し、日本の技術、文化等の魅力を充分に伝えられるよう、展示メッセージやサイネージとともに、デジタルデバイスの活用、多言語対応スタッフの配置等により多様な言語ニーズへの対応を検討する。

８　環境配慮への対応

運営面においても SDGs の達成に貢献し、その先の社会も見据えた日本の将来像を提示すべく、計画段階から環境負荷の削減に配慮して検討する。

９　来場者の安全の確保

来場者の安全を最優先とし、感染症対策、暑熱対策等を含めた管理運営計画を検討する。また地震や台風、荒天時等の緊急対応も十分に想定した計画を検討する。

10　警備・警護

本出展が日本国政府の出展であることに留意し、政府出展としての風格と品位を保持しつつ、展示物の警備や本出展を訪れた賓客の警護等への対応を検討する。

Ⅵ　行催事計画

行催事は、動的な展示とも捉えることができ、屋内外における各種展示の効果をより高めるとともに、その更なる理解を促すものとする必要がある。そのため、政府出展の理念や展示内容、博覧会全体で検討される行催事計画を踏まえつつ、行催事を通じた来場者との双方向のコミュニケーション創出の視点を持ち、行催事の区分を設定するとともに、以下の要素を組み込んだ行催事計画を検討する。

1　メッセージ性

政府出展の理念を印象的に伝える機会として、暮らしとともにある日本の自然観や明日の社会と暮らしに対する理解の後押しとなり、来場者の心に残り、行動変容を促す行催事を検討する。

2　エンターテイメント性

国内外から訪れる来場者に対し、感性に訴え、感動や共感につなげるとともに、誰にとっても楽しく分かりやすい行催事を検討する。

3　参加性

多様な主体が参加できる機会として、多様な価値観の交流や、新たなつながりを促進する行催事を検討する。

4　話題性

長期にわたる博覧会の開催に対し、来場促進やリピート来場に寄与することを目指し、多彩で魅力に富み、人に伝えたくなる行催事を検討する。

5　季節性

開催から閉会までの各種行催事において、日本の気候風土と関連する行事や祭礼、植物や作物などの季節感とともに、イベントとしての多客時期や閑散期なども考慮したスケジュールを検討する。

Ⅶ　広報・参加計画

会期前からの機運醸成、会期中の情報発信、会期後の追体験という、３つの段階を通じ、各段階に応じた情報提供を行い、多様な主体との共創を図るとともに、デジタルを活用した効果的なコミュニケーションを目指す。

１　会期前からの機運醸成につながる広報

コミュニケーションの目的は、来場者や関係者となり得る全ての人々を対象に、２０２７年国際園芸博覧会および政府出展に関する認知及び理解を促し、関係構築を実現していくことである。そのため会期前から様々な情報を展開することで機運醸成に寄与するとともに、幅広い層の関心や行動の喚起、共有につなげることを目指す。

２　未来を担う子供や教育機関との共創

子供たちが日本の農や自然に対する学びの場となることを目指し、会期前から地域や教育機関と連携し関係構築につながる計画を検討するとともに、未来を担う子供たちのこれらの産業に対する関心向上につながる計画を検討する。

３　多様な主体の参加による共創

関係機関・団体、自治体、市民、企業等の多様な主体との共創を目指し、情報発信や施策、連携した取組を検討する。

４　デジタルを活用したコミュニケーション

会期前から会期中に渡り、リアルでのコミュニケーションに加え、リアルとデジタルを融合させるなど、より効果的なコミュニケーションとなるよう、状況に合わせてデジタルを活用することで、相互関係構築につながるコミュニケーションを目指す。

５　会期後のコミュニケーション

来場者をはじめ政府出展に関する情報発信に触れた方が、植物との関わりから広がる人や社会と自然との新たな関係構築につながるコミュニケーションを計画する。

花き園芸・造園・農等の各産業はもとより、様々な分野の団体や個人が本博覧会を機に積極的に参加・交流・連携し、気づきと共感を得ることで、花き園芸・造園・農を担う次世代の人材育成やビジネスの拡大等につながるよう、培われたコミュニティや取組等がレガシーとして残すことを目指す。

Ⅷ　今後の進め方と検討課題

１　令和５年度以降の推進スケジュール

本計画策定後、２０２７年国際園芸博覧会が閉会する令和９年度までの主なスケジュールは以下のとおりである。(2023 年 3 月時点)

今後の検討にあたっては、政府出展を構成する屋外展示、建築、屋内展示ごとに検討体制を構築する。また、本計画に基づき、各分野が調和した出展とするため、各分野が連携して検討を進める仕組みの導入を図る。